



うのぜみステップス五度目の展覧会である。毎年メンバーと開催趣旨が異なっている。今回参加した北村奈緒子は2009年、京都嵯峨芸術大学を卒業し、2014年、大阪で活動を再開した。田中詩奈は1991年同大学を卒業、今年愛知県立芸術大学大学院を修了し、関西で旺盛に活動を繰り広げている。会場に居た北村によると、二人はここで初めて知り合ったという。

今回の開催趣旨を引用する。「伸び、揺らぎ、繋がり、蓄積され、削り取られ、塗り込められ、生成と消滅を繰り返しながら線が、あるいは線ではなくなったものが現れる。線それ自体はいかなる概念も媒介しない。そしてそれ自体として意味を所有しない。ただ、文脈として生まれてくる関係性が状態としての存在となり、思考の主体となり、実存の必然となる。／線は線の中であって自ら文脈を生成し、何者でもありえるものとして自立して存在する。用途としての線ではなく、可能性を持った重要な状態としての線の文脈を、かたちとしてあるものの見えない行間に見る。」

画廊内に宇野は一点、北村と田中は各三点展示し、事務所に宇野は3点、北村は5点、田中は2点、田中のみ入り口に4点展示した。宇野は開催趣旨に「線の文脈」を強調した。私は各人の線の躍動感に魅了された。それは各人の色彩感覚によるものであろう。互いの作品に反応し、画廊全体に心地よい渦が巻き、それぞれの作品を異化しつつもその本領が発揮できる展覧会となった。

宇野の作品が持つ振幅は、空間性よりも時間性に作用しているように見えた。田中の反復は地に足を据えて、画面に振動を発生させる。北村の有機的な揺らめきは、固定される筈がないのに未知の容を形成する。明確なのにぼやける、ぼやけているのに明瞭となる線の競演はそうないだろう。それにしても宇野の精力的な活動には頭が下がる。私は昨年、宇野と共に韓国に行き、今年は宇野が勤める大学の卒業展覧会、宇野が実行委員長を務めた観光に立ち会った。うのぜみ展が大学の広告塔の役割を果たして何が悪い。このような展覧会は、もっとあって然りではないだろうか。

